人文学報 第515-9号　2019年3月

水を統治する
――前近代ファイユームにおける灌漑と国家*――

ブレンダン・ハウグ
髙橋　亮介 訳

要　旨

エジプトの灌漑の健全さにとって国家が不可欠であるとエジプト学者はかつて確信していたが、最近の研究は逆に地方の主体性を強調している。本論文では、ヘレニズム時代からアイユーブ朝時代にかけてのファイユームの灌漑に関する事例研究を通じて、この2つの視点の間の溝を埋めることを試みる。国家の力と地方の主体性の密接な関わりが、国家計画の産物であるプトレマイオス朝時代のファイユームの運河水系を十全に維持するために不可欠であった。しかし、介入してくる中央の力がなくなれば、水系は小さくなり、農村社会は地方で維持できる均衡の取れた新しい姿を作り出した。したがって国家の力はファイユームの灌漑の存在そのものを決定づけるというよりも、灌漑を助ける要因であった。つまり、国家は灌漑農業そのものの存続ではなく、運河水系という特定のインフラストラクチャーの組織にとって不可欠であったのである。

はじめに：国家の再定位

歴史家にしてパピルス学者のドロシー・トムソンは、1971年に発表した『ケルケオシリス：プトレマイオス朝時代のあるエジプト農村』のなかで、水と国家の関係を簡潔に考察している。ナポレオン・ボナパルトの見解[1]と「エジプトの問題とは灌漑の問題だ」という近代エジプトの初代大統領ヌバル・パシャの

* 本論文は、準備中の著書 *Garden of Egypt: Water, Society, and the State in the Premodern Fayyum* の一章を修正したものである。本稿の暫定版は2018年9月24日に早稲田大学で発表された。東京への招聘および本論文の翻訳と出版について髙橋亮介氏に、また滞在中の寛大な援助について熊倉和歌子氏に感謝する。

有名な金言をどちらも引用して、トムソンは灌漑の管理を中央政府の根源的な役割だとしている。「灌漑システムの管理、堤防と水路の管理、氾濫の高さと耕地の広がりの管理が、成功したエジプト政権の特徴的な活動であった。したがってクレオパトラが離れたローマにおり、氾濫の水位が低かった紀元前48年に、エジプトはすぐに飢饉に陥った」と彼女は記している[2]。

このような主張は、19世紀初めからエジプト学の灌漑に関する理解を規定してきた国家統制主義の産物であり、当時物議を醸し出すことはほとんどなかった[3]。しかし、古代における水管理の研究の枠組みとして国家の力はいまや支持を失い、代わりに現在の研究は地方の主体性を強調する。プトレマイオス朝史の研究者ジョセフ・マニングは現在の理解をまとめ、ファラオに体現される集中した権力を持つ支配者がいながらも、エジプトには専制的はおろか直接的にも灌漑を管理するのに必要な行政機構がなかったと記している。マニングは、ファラオとプトレマイオス朝の王の役割は監督に過ぎないとし、「地方エリートと発展していく官僚機構」が水の管理業務の主役だとする[4]。そして「灌漑と中央の国家権力との関係は、税収への関心を除けば存在することはなかった」と主張している[5]。エジプト学者フアン・カルロス・モレノ・ガルシアも同様の理

---

1 「（エジプト以外の）いかなる国において行政が公共の繁栄にこれほど影響を持つことはなかった。もし行政が良好であれば、運河はうまく掘られ維持され、灌漑の規定は正しく守られ、氾濫は広範囲に行き渡った。もし行政が悪いか残忍か弱ければ、運河は泥でせき止められ、堤防は十分に手入れされず、灌漑の規定は破られる。そして冠水システムの原理は治安の乱れと個人や地方の利己的な利益追求に妨げられる。［フランスの］ボースやブリーでの雨や雪に政府は影響力を持たないが、エジプトでは氾濫が及ぶ範囲に政府が直接の影響力を持つのだ。このことがプトレマイオス朝が統治したエジプトと、ローマ人の支配下ですでに衰退し、トルコ人のもとで破滅したエジプトとの違いを生んだのだ」: Napoleon Bonaparte, *Correspondence de Napoléon Ier*, *Tome XXIX: Oeuvres de Napoléon Ier a Sainte-Hélène*（Paris: Imprimerie Impériale 1870）, 463.［訳文は著者の英訳から訳者が日本語訳した］。Crawford（Thomspon）の引用は、Alexandre Moret, *The Nile and Egyptian Civilization*, Trans. M.R. Dobie（London: Routledge and Kegan Paul 1927）, 34の抜粋からである。

2 Crawford（Thomson）, *Kerkeosiris*, 106. Thompson, “Irrigation and Drainage,” 107でも再度述べられている。

3 Haug, “Water and Power.”

4 Manning, *Last Pharaohs*, 44. Manning, *The Open Sea*, 103でも繰り返されている。より古い Manning, “Irrigation et État,” esp. 617-623も参照。

5 Manning, *The Open Sea*, 103.

解を示し、「灌漑の管理は通常は共同体内部の問題であり」、したがって中央の国家の役割は「季節的な氾濫の水位に基づき予想される税額の計算に限られていた」とする[6]。この新しい通説をもっとも明白に示すのが、末期王朝時代までのエジプト統治の発展を跡付けたモレノ・ガルシア編『古代エジプトの行政 *Ancient Egyptian Administration*』（2013年）である。22章からなり1000ページを超える論集のなかで、水の管理についての詳細な分析は、中王国時代（紀元前2040-1782年）の地方行政の研究においてのみ現れる[7]。

この解釈の転換は、急ではあるが有益な修正である。新しい解釈は中央の国家の管理能力を誇張した古い解釈を打ち砕き、エジプトの農業景観を作り出した主体として正しく評価されていなかった農村の人々の能力を強調している。こうした利点にもかかわらず、現在の状況は、前近代の灌漑における国家の重要な役割を否定しており、行き過ぎが見られる。はっきりさせておくが、古い世代の教条的な国家統制を生き返らせようという提案を私はしたいのではない。むしろ私が指摘したいのは、国家主義の否定は、史料に基づいて正当化されようとも、国家権力と地方の主体性を対立させるという誤りを無意識のうちに犯してしまうことである。こうした二分法は、水と農村社会と前近代の中央政府の三者間にある非専制的な様々な関係をよりニュアンスをもって理解することを妨げてしまう。いまや前近代国家の行政上の限界を正しく認識しながらも、その関心と能力をも重んじるという新しいアプローチが求められているのである。

私に着想を与えたのは、自然と農村社会と国家の深く複雑な関係を明らかにした、18世紀のオスマン帝国支配下エジプトの灌漑に関するアラン・ミカイルの最近の研究である[8]。オスマン帝国は生産性の低い地域を維持するためにエジプトから余剰作物を得ていたので、その財政政策は必然的にエジプトの灌漑に深く関わることとなった。灌漑されるエジプトの農村部と海外の食料が足りない都市との結びつきの強さは、水管理の日常的な業務に直接的に関与する強い動機をオスマン国家に与えた。しかし、そのような直接介入は実現しなかった。代わりにオスマン国家が実践したのは、集団での堤防と運河の維持に関わるローカルで自然発生的な慣習を利用する「調整された地域主義 coordinated localism」

6 Moreno García, “Ancient States and Pharaonic Egypt,” 215.
7 Willems, “Nomarchs and Local Potentates.”
8 Mikhail, “An Irrigated Empire,” *Nature and Empire* and *Under Osman’s Tree*, 19-110.

であった。毎年の整備作業への参加を農民に促し、働かずに利益だけ得ようとする者たちを強要し、大規模あるいは急を要する（または大規模かつ急を要する）事業のための労働力と資源を調整することで、国家は地域的な努力を援助した。地方の資源だけでは完了できない事業について助けを求めて村人たちが出した嘆願書にも、役人たちは対応した。嘆願書のなかで村人たちは、国家の援助が得られなければ、その年の穀物の税収には損害が生じざるをえないと脅しもした。エジプトの灌漑へのオスマン国家の関与が、エジプトの農民そのものへの関心によってではなく、課税対象となる余剰農業生産物を途切れずに得たいという欲求によって動機付けられていたことを、このようなレトリックは思い出させてくれる。

ミカイルの研究が説得的に示すのは、単なる「税収への関心」が国家を農村の現実に深く関与させうるものの、灌漑の全面的な管理という関係は決して望まれなかったということである。彼のモデルは興味をそそるもので、前近代エジプトの水管理研究の新しい方法を示唆する。たが注意が必要である。ミカイルの研究は、カイロとイスタンブールのオスマン帝国のアーカイブにある何万もの行政文書に依拠している。パピルス文書が大量にあると言っても前近代の史料は相対的にまばらであり、ミカイルの研究と同じほどはっきりと古い時代について明らかにするのは不可能である。より深刻なのは、ミカイルのモデルが短い期間の 1 つの国家の農財政を記述したのに対して、古代および中世エジプトを扱う歴史家は領域、目標、制度がしばしば相当異なる多くの国家に直面する[9]。さらに農村地帯に取られる政策は、プトレマイオス朝支配の 3 世紀間やローマ・ビザンツ帝国支配の 7 世紀間といった 1 つの時代区分の内部においてすら、一定だったわけではない[10]。したがって、前近代エジプト全般を普遍的

[9] エジプトの国家の歴史的な断絶については Manning, “Irrigation et État,” 619参照。政治と制度の変化については、Andrew Monson, *From the Ptolemies to the Romans: Political and Economic Change in Egypt*（Cambridge: Cambridge University Press 2012）および Stephan Conermann and Gül Şen（eds.）, *The Mamluk-Ottoman Transition: Continuity and Change in Egypt and Bilād al-Shām in the Sixteenth Century*, Ottoman Studies/Osmanistische Studien, Vol. 2（Göttingen: V&R unipress 2016）参照。

[10] 例えばローマ支配の前期と後期とでは明白な変化がある：Jairus Banaji, *Agrarian Change in Late Antiquity: Gold, Labour, and Aristocratic Dominance*（Oxford: Oxford University Press 2007, updated edition）.

に説明できる単一のモデルは望めない。代わりに利用可能な史料には欠落があることと時を経て起こる頻繁な変化という現実のどちらも正しく認識したフレキシブルなモデルを用意しなければならない。ミカイルの研究に匹敵する掘り下げと詳細さは望めないが、前近代国家、農村社会、エジプトの環境の三者間の関係が複雑に発展していく様相を、途切れ途切れながら、分かりやすく示すことは可能である

こうした限界を踏まえ、本論文では、プトレマイオス朝、ローマ・ビザンツ帝国、アイユーブ朝の3つの時期におけるファイユームという一地域についての通時的な事例研究を通して、前近代エジプトの水の管理の問題を論じたい。ファイユームはおそらくこのようなアプローチをするのに最も適切な場所である。どの時代も同じように確たる史料があるだけでなく、ファイユームの灌漑された景観自体が中央でなされた国家計画の産物であったからである。国家の力によってこれほど大きく形作られた農業景観はエジプトには他には存在しないので、ファイユームの灌漑の歴史は、そこでもっとも力を振るい能力を発揮した前近代国家というものを明らかにする可能性を持っているのである。

国家の関与の事例研究としてのファイユーム

前3世紀の初めから半ばのプトレマイオス朝初期に、この新しい王国の退役兵のための土地を作るために、かつて湖となっていた巨大な盆地が干拓された。莫大な資金と数十年にわたる数千人の労働者の動員を必要とした、このプロジェクトはやがて約1200～1600平方キロメートルの新しい土地を作り出し、エジプトの全耕作地は5～7パーセント増加した[11]。かつて「湖」（*hê limnê*）と呼ばれていた、この地域は紀元前258年までに、プトレマイオス2世の姉にして妻であり、すでに亡くなっていたアルシノエを讃えて、アルシノイテス・ノモスと名付けられた[12]。最近の信頼しうる推計によれば、この時点でファイユームは8万5000人から10万人の住民が少なくとも145の村落あるいはより小さな農業共同体で暮らしていた[13]。

[11] 干拓については、Manning, *Land and Power*, 103-108参照。

[12] ギリシア語のノモスは、40強存在したエジプト内部の行政区分を指すエジプト語 *sepat* に対応する。

この大きく拡張した土地は、19世紀までエジプトで唯一の放射状に伸びる運河水系によって耕作が可能になった。現在も機能している運河水系は、ダイルートのすぐ北でナイルから分かれる支流ユースフ運河（ギリシア語ではトミス・ポタモス（*Tômis Potamos*）、中世アラビア語ではマンハー（*al-Manhā*）と呼ばれていた）から水を得ていた[14]。蛇行しながら約200キロメートル北上したユースフ運河は西に急に曲がり、ラーフーン（古代のプトレマイス・ホルム）の町とハッワーラト・アドラーン（*Hawwārat ʻAdlān*）の町があるところでファイユームに流れ込む。このユースフ運河の流入地点で流れを制限し、灌漑に必要なだけの水を取り込むために、プトレマイオス朝の技師は堤防とダムを作った[15]。そして運河水系は自然の傾斜を用いて盆地中に水を供給する。灌漑された廃水は、北の湖（古代のモエリス湖、現在のカールーン湖 *Birkat Qārun*）に排水される[16]。

この景観を計画し作り上げるのに国家の力が不可欠であったことは認められて久しい[17]。しかし、まだ十分に理解されていないのは、ファイユームの独特な運河水系が引き起こす継続的な管理上の困難についてである。エジプトの他の場所では、ナイルの氾濫した水を留めて利用するために作られた、複雑だがそれだけで機能する仕組みである冠水ベイスンによって農地が灌漑された。1つのベイスンに連なる共同体群は別の共同体群とは独立しており、そこでの灌漑はナイル川の氾濫原の他の場所での水の入手可能性に直接の影響を与えなかった[18]。これとは対照的に、ファイユームの放射状の運河水系は、1つの公共の

---

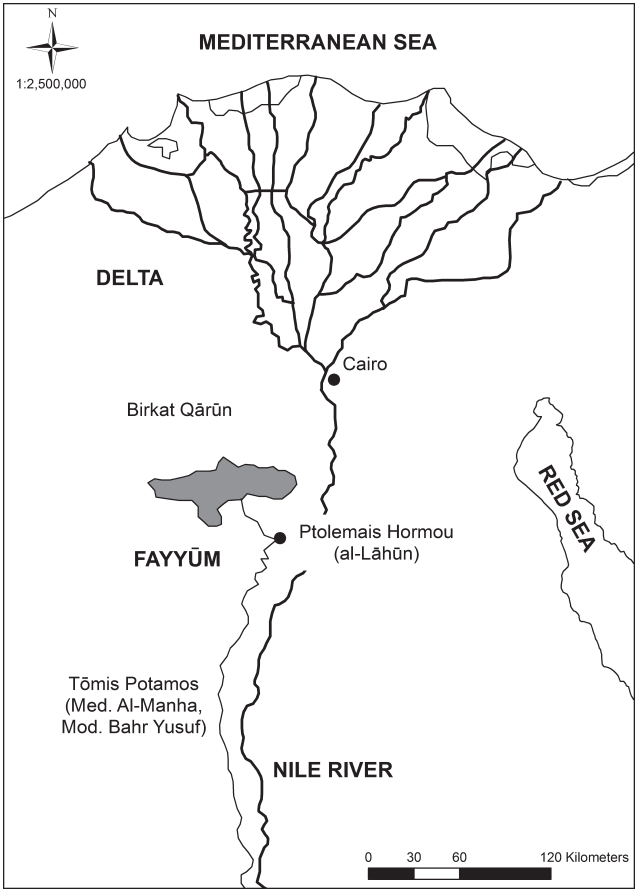
[13] Willy Clarysse and Dorothy Thompson, *Counting the People in Hellenistic Egypt*, Vol. 2（Cambridge: Cambridge University Press 2006）, 95からの数値。

[14] ユースフ運河の始点は13世紀以来はダイルートと結び付けられている：Yaqut al-Rumi, *Muʻjam al-Buldān*（Beirut: Dar Sader 1955）, II.453およびナーブルスィー『ファイユームの村々』34）。また簡潔な外観としてJohn P. Cooper, *The Medieval Nile: Route, Navigation, and Landscape in Islamic Egypt*（Cairo: AUC Press 2014）, 101-102参照。

[15] Bagnall and Rathbone, *Egypt*, 142. ラーフーンのダムについての中世の記述については、Rapoport and Shahar, “Irrigation in the Medieval Islamic Fayyum” と Haug, “Environment, Adaptation, and Administration,” 58-59参照。

[16] ファイユームの歴史水文学については、Willems *et al*., “The Analysis of Historical Maps,” 301-309参照。現代の運河は基本的に地形学から明らかになる古代の流路と同じである。Römer, “The Nile in the Fayum” 参照。

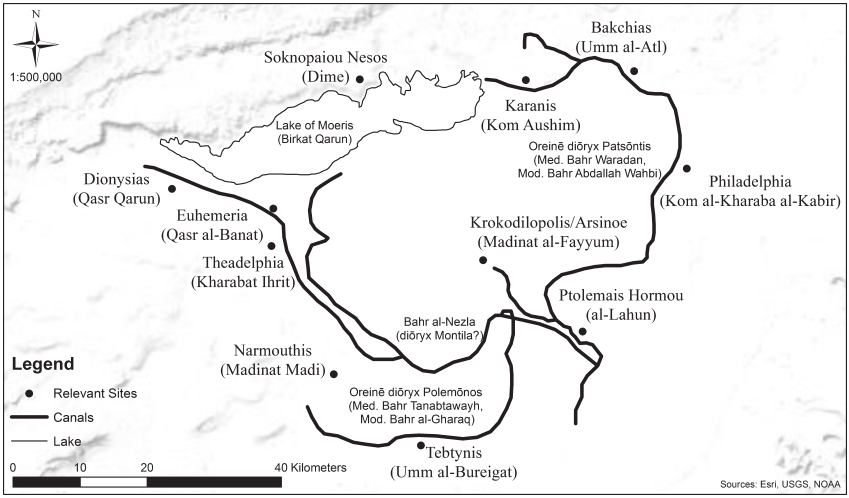
[17] 例えばThompson, “Irrigation and Drainage” 参照。



地図１　エジプトとファイユーム

水路に共に依存する村々が密接に鎖のように繋がる状態を作り出した。この相互に強く結びついた水系において、それぞれの村が下流へ水を流しつつ、共用の水路から自らの取り分を確保できるかは上流の隣人次第であった。損害を被った村人たちは隣人たちの行為を国家に訴えることもありえたが、隣接する集落

[18] ベイスン灌漑設備の水文学的な分析については、Willems, “Nomarchs and Local Potentates,” 346-349参照。



地図２　ファイユーム地方

間の直接顔を合わせる人間関係がローカルなレベルでの共同作業を容易にしただろう[19]。しかしファイユームの外周を走る運河は70キロメートルの長さにも達し、これらの運河に依存するすべての共同体が緊密に接触し協力することは不可能であった。したがって、この相互に繋がっているが人間関係を構築しない水系の管理は、隣人と知人の利益だけでなく、見ず知らずの他人の利益のためにも構成員全員が協働できるかにかかっていた。

古代国家は、この独特な環境の維持にかなりの関心を保ちつづけた。プトレマイオス朝初期のファイユームへの関心は主に政治的なもので、それは、この新興王国がエジプトの支配を固め、軍事力を維持するための領土を確立する必要があったからである。ローマの関心は、のちのオスマン国家のように主に財政的なもので、エジプト外の諸都市を養うために一定かつ予測可能な量な余剰農産物を確実に獲得することに向けられていた。ファイユームの社会的な景観

[19] この後になされる *SB* 18.13735（前２世紀）に関する議論を参照。すぐ上流にいる隣人たちの行動への下流からの抗議については、*P.Wisc.* 1.32（305年）と *P.Sakaon* 35（およそ332年）参照。ファイユームの灌漑の地方自治主義全般については、Haug, “Predictably Unpredictable” 参照。

が発展するにつれて、国家の浸透の性質も変わり、プトレマイオス朝初期のより中央集権化された行政からローマ支配下の調整された地域主義へと転換した。こうした行政の違いにもかかわらず、プトレマイオス朝もローマ人も運河水系があらゆる点でうまく機能し、水系の始まりから遠くに広がったいくつもの末端に至るまで水が妨げられずにスムーズに流れるように相当な努力をした。しかし、ローマがかなり依存していた地方自治主義 communalism は、古代末期にファイユームの村の多くで人口が徐々に減少したせいで維持できなくなった。村々が衰退すると、運河水系全体を維持していた国家と社会の関係は磨耗し、運河の一部はやがて放棄された。したがって13世紀のアイユーブ朝の史料に再登場したファイユームは、古代に比べるとはるかに小さく貧しかった。プトレマイオス朝とローマ帝国と大きく異なり、アイユーブ朝の国家はファイユームの農業に政治的・財政的関心を持たず、農村部の灌漑について持続的な関係を確立しようとはしなかった。それでも公的には無視されていたものの、アイユーブ朝期には小規模だが成功した運河水系が存続し、完全に地方の主体性によって維持された。この持続性が示唆するのは、国家の力はファイユームの灌漑の存在そのものを決定づけるというよりも、灌漑の助けとなる要因であったということである。つまり、国家は灌漑農業そのものの存続ではなく、運河水系という特定のインフラストラクチャーの組織にとって不可欠であったのである。

中央による調整：プトレマイオス朝初期の「建築技師」

プトレマイオス朝の干拓に続く数十年間は、ファイユームの水の流れを維持する上でローマ帝国を助けることになる村落共同体はいまだ形成途上であった。したがって、かなりの権限がアルキテクトン（*architektōn*）すなわち「建築技師」として知られる役人に与えられていた。建築技師は、この地方の新しい運河水系の維持に必要な労働力と資材を組織し監督する責任を負っていた。この役職とその職務を知らしめる史料は「クレオンとテオドロスの文書群」である[20]。彼らは前260年から237年まで 2 代続けて建築技師を務め、公私にわたる文書を残した。重要な責任にもかかわらず、クレオンとテオドロスは労働者を恒常的に持たず、住民に無償労働の義務を課すこともなかった。彼らは在地の私人である請負人を広範に利用した。運河水系のどこであれ整備か修繕が求められた

とき、建築技師とファイユームの財務長官であるオイコノモス（*oikonomos*）は共同で、ノモスの首都であるクロコディロポリス（後代のマディーナト・アルファイユーム）で労働契約を公的な競売に出した。落札者は、給与を現金で受け取る代わりに、労働者を集め作業を完了させる責任を負った。典型的な例が、前246/245年にテオドロスが結んだ契約である（*P.Petrie Kleon* 91, no.6）。導入部での日付を記す形式文に続いて、契約書はなすべき仕事を簡潔に述べる。この契約では、首都のすぐ北のどこかに位置する2つの集落であるベレニケ・ネア村とペルセア村を流れる運河を詰まらせた土砂の除去である。

「王の書記」[21] ペトシリスと建築技師テオドロスの立会いのもと、オイコノモスであるヘルマフィロスによって競売で国庫から以下の作業のために契約が与えられた。パオン方面の穀物庫から発し、ペルセアと呼ばれる村を過ぎて走っている、アルシタルコス・ノマルキア[22]にあるベレニケ・ネアの運河において浚渫すること。（欠損）指示した場所から始まる土砂から、なぜなら土砂があるので（後略）。[23]

詳細な指示は続き、この事業の作業量がキュービット単位で表される体積で

[20] Bart Van Beek, *P. Petrie Kleon*. パピルス学の術語で、通常「文書群 archive」は古代に意図的に集められた複数の文書を意味する。一方、「文書集 dossier」は、現代の研究者が特定のことがらや人物に関連づけられた複数の文書を意味する。Katelijn Vandorpe, “Archives and Dossiers,” in Roger Bagnall（ed.）, *The Oxford Handbook of Papyrology*（Oxford: Oxford University Press 2009）, 216-255参照。

[21] バシリコス・グランマテウスすなわち「王の書記」は、ノモスの記録管理の責任者である。

[22] ノマルキア（*nomarchia*）は、プトレマイオス朝初期のアルシノイテス・ノモス内の行政上の地理区分である。Willy Clarysse, “Nomarchs and toparchs in the third century Fayum,” in *Archeologia e papyri nel Fayum. Storia della ricerca, problemi e prospettive. Atti del Convegno Internazionale, Siracusa 24-25 Maggio 1996. Quaderni del Museo del Papiro, Siracusa, 8*（Siracusa 1997）, 29-54.

[23] Lines 209-215: ἐξεδόθη ἐκ [τοῦ] βασιλικοῦ ὑπὸ κήρυκα διὰ Ἑρμαφίλου οἰκονόμου [[καὶ …]] παρ[όν]τος Πετοσίριος τοῦ βα(σιλικοῦ) γρ(αμματέως) καὶ Θεοδώρου ἀρχιτέκτονος· ἐν τῶι [Β]ερενίκης τῆς νεᾶς ποταμῶι τῆς Ἀριστάρχου νο(ομαρχίας) τῶι [ἄγο]ντι ἀπὸ τοῦ κατὰ Πόαν θησαυροῦ παρὰ κ[ώμ]ην τὴν καλο[υμένη]ν Περσέαν [...] τῆς ἄμμου ἀνακαθᾶρ[ι ἀπὸ τοῦ] ἀποδιχυέντ[ος] διὰ τὸ [ὕ]φαμμον εἶναι... ［訳文は Bart Van Beek による英訳を参考にし訳者が日本語訳した。］

示されている[24]。さらに請負人は、作業場所と運河の堤防（*chōmtata*）との間に３キュービットの間隔を安全のために確保するように警告された。堤防は運河が氾濫期に決壊して水が溢れ出ないようにする運河の岸の盛り土である。堤防が機能するように補強する責任も請負人は同時に負った。作業に必要な器具はすべて公立保管庫から提供され、作業終了後に返却されることになっていた。契約が果たされないか取り決めが守られなかったならば、作業は再び競売に出されるか、一日単位で賃金労働者が雇われた（これらは同時にも起こり得た）。いずれにせよ請負人は、最初に決められた給与の1.5倍の罰金を支払い、追加で生じた費用を国家に補償することを強制された[25]。

この契約書や文書群中の他の契約書が示すのは、運河の建設、修繕、浚渫、そして堤防の修繕と補強から、ファイユームの多くの水路に架かる橋の建設、修繕、時々の取り壊しに至る灌漑作業のすべての重要な過程をクレオンとテオドロスが競売にかけていることである[26]。それゆえ、プトレマイオス朝初期のファイユームの水管理について現代の研究者が抱く印象の根拠となるのが、これらの史料である。プトレマイオス朝による社会と経済の統制という古い通説を説得的に批判するジョセフ・マニングは、クレオンとテオドロスの契約書が「東洋的専制」や水利における国家統制を示さないと主張した。むしろ労働力は公けの競売で自由に集められ、適切に報酬が払われ、「作業を遂行する動機を与えながら、効率を求めて緩やかに監督された」とされる[27]。さらに、労働力が不足していても、クレオンとテオドロスは住人を動員せずに、労働を促す減税措置をとった[28]。この解釈によれば、プトレマイオス朝のファイユーム干拓はエジプトの土地に及ぼす国家の力を印象的に示すが、国家による統治というユニークな「水利」モデルではない。

この議論自体はまったく正しいが、統制的で専制的な国家としてのプトレマイオス朝という古典的なイメージを打破するという目的にかなっていることに、

---

[24] １キュービット（*pēchys*）は、0.46メートル。

[25] 労働契約全般については、S. Van Reden in James G. Keenan, Joseph G. Manning, and Uri Yitach-Firanko, *Law and Legal Practice in Egypt from Alexander to the Arab Conquest*（Cambridge: Cambridge University Press 2014）, 408-410参照。

[26] *P.Petrie Kleon* 90 and 91.

[27] Manning, *Land and Power*, 107.

[28] *P.Petrie Kleon* 17（254 BCE）.

この解釈の有用性がある。それゆえ、この解釈は、建築技師個人が関与する地方のレベルで、国家がどの程度ファイユームの灌漑に関わったかを公平に評価するものではない。建築技師の力は絶対的なものではなかったが、密接に繋がった運河水系のどこかでの問題は連鎖的な問題を下流で引き起こしたので、彼はどんな些細なものであれ、問題を見逃すことはできなかった。したがって建築技師の注意は、個々の村の運河と堤防の働きという些細なことや運河水系全体の水流の規制に、微視的かつ巨視的に向けられていた。

建築技師の権限が及ぶ範囲について示唆的なのは、前257年にクレオンに宛てられた有名な書簡（*P. Petrie Kleon* 17）である。発信者はパンケストルという人物である。彼は、王国の財務大臣であるディオイケテス（*dioikētēs*）の地位にあるアポロニオスが所有し、ファイユーム北東のフィラデルフィア村にある広大な所領の管理人であった[29]。この書簡のなかで、クレオンがフィラデルフィアをないがしろにし、近くの「小さな湖」と呼ばれる地域に注意を向けすぎているとパンケストルは文句を言っている。「あなたはあなたのやり方を続けるべきではない。そうではなく、少しの間、私たちのところにも来て、土地が灌漑されていないのを知り、なにゆえ私たちが灌漑していないかを尋ねるべきである。あなたは小さな湖だけでなく、ここの土地の作業も指揮するために任命されているのだから」と彼は述べている。さらに「明日、放水路で私たちに会い、脇の水路にどのように水を通すのか教えるために、すぐに来てほしい。なぜなら私たちは経験に乏しいのであるから。私たちはあなたに人員と他の物資を、あなたが要求するだけ提供するだろう」と続けている。そしてディオイケテスであるアポロニオスその人に、クレオンの怠慢を知らせる書簡をしたためると脅しをかけて、パンケストルは筆を擱いている[30]。

パンケストルの書簡は、地位の低い人を自らの意に従わせようとする、コネを使った脅迫の例だとしばしば見なされてきた[31]。これはある程度正しいだろうが、クレオンの責任が 1 つの村の 1 つの所領の問題を含むノモス全体に及んでいる点においてパンケストルは正しい。事実、前242/1年に建築技師が送った一連の書簡から、複数の場所での様々な問題に彼が注意を向けていたことが分

[29] 恩賞としての所領（*doreai*）について簡潔には、Andrew Monson, “Dorea,” in Roger S. Bagnall（ed.）, *The Encyclopedia of Ancient History*（Wiley-Blackwell: London and New York 2012）参照。

かる[32]。ある書簡では、氾濫で損害を被ったプトレマイス・ホルムの水門を補強するための葦を送るように、建築技師は別の役人に哀れそうに頼んでいる。別の書簡では、おそらく氾濫期に運河水系全体への給水量を増やすためにプトレマイス・ホルムの水門をさらに開けることについて議論している。また別の書簡では、増えた水が留められ、近くの谷間への流れ出てしまわないようにプセナルオという村に土の堤防を作るように部下に厳しく命じている。さらに別のいくつかの書簡では、プセオンノフリス[33]やセベンニュトス[34]といった村々にある未完成の堤防と運河に目を向けている。

だが、建築技師のファイユームの灌漑への関与の深さと幅広さをもっともはっきり示すのが文書群に残された会計簿である。これらの会計簿が非常に詳細に記録しているのは、ノモス中の様々な灌漑作業の完了、掘削された土砂の正確に計算された量[35]、労働者に支払われた賃金である[36]。ある会計簿は、氾濫の前後にファイユーム各地の堤防と河岸を補強するために使われたイグサ（またはその束）の数を、100万を優に超えて綿密に数え上げてすらいる[37]。ごく限定された場所とファイユーム地域全体を同時に視野に入れる、これらの会計簿は、運河水系があらゆる場所で機能するための深い関与を示すのである。

---

[30] Πανακέστωρ Κλέωνι χ[αί]ρειν. ἀπεστείλαμέν σοι καὶ [τ]ῆι κθ ὅπως ἂν ἀποστε[ί]λ̣[ῃ]ς π̣[λή]ρ̣ωμα ὃ κατασκ[ευ]ᾶι τοὺς ἀγκῶνας τῆς μικρᾶς διώρυγος. σὺ δὲ φαίνει π̣ᾰρ̣ε̣λ̣ηλυθέναι εἰς τὴν μικρὰ[ν] λίμνην. οὐ̣κ ἔδει μὲν οὖν σε π[α]ραπορεύεσθαι, ἀλλὰ καὶ πρὸς ἡμᾶς παραβαλεῖν ὥρ[α]ς̣ μόρι̣ο̣ν καὶ τεθεα̣μένον σε μὴ βρεχομένην τὴ̣ν γῆν ἐπερωτῆσαι [δι]ὰ̣ τίν᾽ αἰτίαν οὐ βρέχ[ομ]εν. οὐ γὰ[ρ] μόνον τέταξαι τὴν μικρὰν λίμνην ἀρχιτεκτο̣νεῖν [ἀλλὰ] καὶ ταύτην. ἔ̣τι ο̣ὖ̣ν κ̣α̣[ὶ] ν̣ῦ̣[ν] σ̣υ̣νάντησον ἡμῖν αὔριον ἐπὶ τ̣ὴν ἄφεσιν καὶ ἀρχιτεκό[νη]σ̣ο̣[ν] ὡς δεῖ τὸ ὕδωρ ἀ̣γ̣κ̣ω̣[νίζειν· ἡμεῖς γὰρ] ἄπειροί ἐσμεν. σώματ̣α̣ δ̣ὲ̣ κ̣α̣[ὶ] τὴν λοιπὴν [χ]ορηγίαν ἡμεῖς παρέξομέν σοι, ὅ[ση]ν ἂν συντάσσῃς. ἐὰν δὲ μὴ παραγένηι, ἀναγκασθησόμεθα [γ]ράφειν Ἀπολλωνίωι ὅτι μονωτά̣τ̣η̣ ἡ αὐτοῦ γῆ ἐν τῆι Λίμνηι ἄβροχός ἐστιν, ἡμῶν βουλομένων πᾶσαν χορηγίαν παρέχειν. ἔρρωσο. (ἔτους) κθ Μεσορὴ κα. [訳文は Bart Van Beek による英訳と、それを修正した著者の英訳を参考に訳者が日本語訳した。]

[31] Naphtali Lewis, *Greeks in Ptolemaic Egypt* (Oxford: Oxford University Press 1986), 42-43.

[32] *P.Petrie Kleon* 88 (242-241 BCE). これらの、そして他の書簡の概要については、Thompson, “Irrigation and Drainage,” 114-116参照。

[33] Pseonnophris: https://www.trismegistos.org/place/1971.

[34] Sebennytos: https://www.trismegistos.org/place/2103.

[35] *P.Petrie Kleon* 94 (250-248 BCE).

[36] *P.Petrie Kleon* 92 (258-257 BCE).

前256年のとても断片的な書簡（*P.Petrie Kleon* 18）からは、非常に狭い地域への強迫観念的な関心の背後にある基本原理を間接的であるが見て取れる。発信者と受信者のどちらの名前も失われているが、年代は前250/249年にクレオンが建築技師を辞めるより前である。この文書の文脈と本来の意図は復元できないが、わずかに残った部分は以下のように訳せる。

（欠損）モンティラにある水門が閉じられ、運河が（欠損）ブコロン・コメの近く（の水門を？）私は閉じた（欠損）堤防と橋が（欠損）できない（ことを知っておくように）（欠損）プトレマイスにある 1 つの水門を閉じる必要があるかどうかを議論すること（欠損）。さようなら。29年エペイフ月 5 日[38]。

一見有益な情報を得る見込みはないが、この断片に残る地名は参考になる。プトレマイスとその水門、つまりユースフ運河からの流水を決めるラーフーンでの管理作業についてはすでに言及した。モンティラという運河は、ファイユームの大きな水路の 1 つであり、その存在はパピルス文書から継続的に紀元後 3 世紀まで知られる[39]。この運河は、首都のすぐ南の、ノモスの中心付近から始まり、ヒエラ・ネソス、ケルケエシス、プトレマイス・メリッスルゴン、そして現代のディフィンヌーであるテベトニュといった村々を通っている。その終点はファイユーム北西のどこかで、正確な位置が不明なブコロン・コメという村の近くかもしれない。だが、のちのローマ期のパピルス文書は、西の砂漠の縁を流れる運河の末端近くに位置し、プトレマイオス朝が築いたテアデルフィアの近くにあるものとして、モンティラ運河に言及している。したがって、モ

[37] *P.Petrie Kleon* 95（260-236 BCE）. 例えば25-32行は、アンモネイオンと呼ばれる未知の場所での作業について次のように記録している。「届けられ使用されたイグサの合計：ファルムティ月31,400、パコンス月332,162、パウニ月417,502、エペイフ月254,410、メソレ月76,140。合計のイグサ1,101,614。」

[38] [-------- τὰς θύρα]ς τὰς ἐν Μοντίλαι κεκλιμένας καὶ τὴν διώρυγα [--------]. . [--------]. κατὰ Βουκόλων Κώμην κέκλεικα [--------]ιν. Ἐπι [...]. . ο̣ὖν̣ ὅ̣τι τὰ χώματα καὶ αἱ διαβάθραι οὐ μὴ [--------] το βουλεύσα̣σθαι, εἰδεῖ μίαν θύραν κλεῖσαι ἐν Πτολεμαίδι. Ἔρρωσο. (ἔτους) κθ̅ Ἐπεὶφ ε̣. ［訳文は Bart Van Beek による英訳を参考に訳者が日本語訳した。］

[39] *P.Tebt.* 3.828（II BCE）, *P.Berl.Leihg.* 13（113-138 CE）; *P.Berl.Frisk.* 1（155 CE）; *P.Col.* 5.1（161/180 CE）.

ンティラの流路は、現在のファイユームの主要な水路の1つであるナズラ運河（*Baḥr al-Nazla*）に少なくとも表面的な類似を見せている（地図2参照）。それゆえ、運河水系の下位組織すべて、すなわちプトレマイス・ホルムでの頭首工から、大きな公共の運河、末端近くの村に至るまでを用いて、水の流れを理解し管理しようとする建築技師の試みを、この書簡は証明する。クレオンとテオドロスが地方の状況に細心の注意を払ったのはこのためである。地方レベルでの灌漑インフラストラクチャーの健全さを確かなものにすることによってのみ、複雑で密接に結びついた水系全体のなかを水が妨げられずに流れることを建築技師たちは保証できたのである。

強制的な地方自治主義：ローマ時代の「五日間賦役」

ファイユームの灌漑の始まりにおける中心的な役割にもかかわらず、「クレオンとテオドロスの文書群」の最後の文書が書かれた紀元前237年より後の史料から建築技師の姿は消える。共同体生活の発展がなんらかの役割を果たしたようだが、いつ、どのようにこの役職が廃止されたのかは分からない。ファイユームの村々が規模を大きくし安定すると、堤防と運河の整備に関わる村自身の内部から生まれた慣習を発展させていく。これにより、運河水系を維持するのに必要な人員と物資を獲得し活用する責任を負っていた役人は不要になった。世界中の小規模灌漑水系においてよく知られる、この種のローカルな慣習は、紀元前2世紀の嘆願書（*SB* 18.13735）にはっきりと言及されている[40]。この嘆願書は、プロトマコスの息子プロトマコスなる人物から、ファイユーム北東の集落アッティヌ・イシエイオンの村書記（*kōmogrammateus*）に送られた[41]。書き手によれば、共同で「土地を水浸しにしないために、盛り土（*chōmata*）用に運河の泥を掘り起こすこと」は、村から伸びる運河沿いの土地を耕す者たち全員にとって「長いこと慣習となっていた」（*ontos ethismou eti anōthen*）。つまり、共同して運河の底の泥から堤防を作り、それにより近くの農地が不必要に冠水し

[40] 比較のための事例は、Jonathan B. Mabry（ed.）, *Canals and Communities: Small-Scale Irrigation Systems*（Phoenix, AZ: University of Arizona Press 1996）, 特に Part I, pp.33-116に収められた諸論考を参照。

[41] https://www.trismegistos.org/place/374.

ないように、来たるべき氾濫に備えて運河を補強していたのである[42]。

このような集団の慣習は、プロトマコスの村のような小規模灌漑によって成り立つ共同体、すなわち「集合的な想像力ではなく、水の流れを維持するために共同で負担する作業によって作られた」共同体の社会基盤である[43]。これが、ローマによる併合時のファイユームの灌漑が作り出す社会であり、これを受けてローマは調整された地域主義という形態を通してファイユームの運河を維持した。オスマン朝支配下の18世紀のように、ローマの行政は地域的な労働を奨励し、参加を強制し、自らで解決できない問題に直面した共同体を助けた。時には、農民たちは自分の村以外の場所、とりわけ運河水系の始点での重要な施設での作業を強いられた。ローマの調整された地域主義が持つ強制的な性格は不可視のものでは決してなかった。

『オクシュリュンコス・パピルス』12巻1409番（*P.Oxy.* 12.1409）として公刊された、役人に回覧された行政文書が示すように、ローマの水管理は属州行政のトップレベルから始まっていた[44]。紀元278年の3月下旬か4月上旬に、属州財政の長であるディオイケテス（*dioikētēs*）の職にあったウルピウス・アウレリウスは、ファイユームとヘプタノミア（デルタとテーバイの間の地域）にある諸ノモスの行政長官であるストラテゴスたち（*stratēgoi*）に書簡を送っている[45]。ナイルの水位がもっとも低くなる乾燥した時期に書かれた、この書簡は、氾濫の到来に備えるよう農民たちを奨励することを地方の役人たちに促しており、次のように書かれている。

---

[42] *SB* 18.13735（II cent. BCE）, ll.4-10: ὄντος ἐθιζμοῦ（l. ἐθισμοῦ）ἔτι ἄνωθεν τοὺς ὑποκειμένους κλήρους καὶ τὰς ἄλλας γᾶς τῇ φερούσῃ ἐκ τοῦ Ἀττίνου Εἰσιήου διώρυγι ἥ ἐστιν ποτίστρα, τούτους δὲ ἀνασκάπτιν（l. ἀνασκάπτειν）τὸν ἐν τῇ διώρυγι χοῦν ἐπὶ τὰ χώματα πρὸς τὸ μὴ κατακλυσθῆναι τὰς γᾶς.［訳文は著者の英訳を参考に訳者が日本語訳した。］

[43] Jessica Barnes, *Cultivating the Nile: The Everyday Politics of Water in Egypt*（Durham, NC: Duke University Press 2014）, 87.

[44] また、およそ同時期の類似した回状の断片である *SB* 14.11349（3世紀）も参照。George M. Parássoglou, “Four Official Documents from Roman Egypt,” *Chronique d’Égypte* 49（1974）, at 338-341.

[45] ヘプタノミアは、メンフィテス、ヘラクレオポリテス、アフロディトポリテス、オクシュリュンキテス、キュノポリテス、ヘルモポリテスの各ノモスからなり、レオンポリテス・ノモスも含まれていた可能性がある。J. David Thomas, *The Epistrategos in Ptolemaic and Roman Egypt*, Vol. 2（Opladen: Westdeutscher Verlag 1982）, 19ff.

ウルピウス・アウレリウスがヘプタノミアとアルシノエの諸ノモスの行政長官（ストラテゴス）たちと徴税官吏（デカプロトス）たちに挨拶を送る。堤防を建て、運河を綺麗にする時が来たので、この書簡によって貴官らに以下のことを知らせる必要を感じた。すべての耕作者と（　欠損　）が、彼らに属する（土地または畑？）で、これらを非常な熱意をもって建てるべきである。皆にとって公けの、各人にとって自らの益をもたらすために、これらの作業から生じる利益を誰もが知ると私は確信している[46]。

ディオイケテスは続いてノモスの役人たちに地方の農民たちを奨励し、地方の都市公職者か私人から監督者を選ぶように命じている。監督者は誰に対しても自ら作業を行うように強制することになり、労働の代わりに支払われる現金の受領は禁じられた。ウルピウス・アウレリウスが続けるところによれば、これにより保証されるのは次のことであった。

喜ばしくも来るべき、いとも聖なるナイルの氾濫に耐えられるように、命じられた高さと幅へと堤防が積まれ、裂け目が埋められるように。そして、共同の設備となるので、土地の灌漑のための水の来るべき流入を容易に受け入れられるように、運河は言われている基準と慣例となっている大きさまで綺麗にされること[47]。

---

[46] *P.Oxy* 12.1409 (278 CE), ll.7-12. Οὔλπιος Αὐρήλιος στρατηγοῖς κ[αὶ] δεκαπρώτοις Ἑπτανομίας καὶ Ἀρσινοΐ του [χαίρειν. τοῦ καιροῦ τῆς τῶν] χωμάτων ἀπεργασίας καὶ τῆ[ς] τῶν διωρύχων ἀνακαθάρσεως ἐνεστη[κότος παραγγέλλειν ὑμῖν ἀναγ]καῖον ἡγησάμην διὰ τῶνδε τῶν γραμμάτων ὡς χρὴ σύμπαντας τοὺς γε̣[ωργοὺς - ca.18 -] ταῦτα ἀπεργάζεσθαι ἤδη μετὰ πάσης προθυμίας ἐπὶ τὰ διαφέροντα αὐτοῖς π̣ ̣ [.....]π̣ρο [ς τὸ δ]η̣ [μοσίᾳ τε] πᾶσιν καὶ ἰδίᾳ ἑκάστῳ συμφέρον· τὴν γὰρ ἀπὸ τῶν ἔργων τούτων γεινομένην ὠφ[ελί]α̣ν πάντας ε̣[ἰδέναι πέ]πεισμαι.

[47] *P.Oxy* 12.1409, ll.12-19: [ὥστε ἐπε]νεχθῆναι εἰς τὸ τεταγμένον ὕψος τε καὶ πλάτος τὰ χώματα καὶ τοὺς διακόπους ἀποφραγῆναι πρὸ[ς τὸ δύνα]σθαι ἀντέχειν τῇ ἐσομένῃ εὐτυχῶς πλημύρᾳ τοῦ ἱερωτάτου Νείλου, τάς τε διώρυχας ἀνα[καθαρῆ]ναι μέχρι τῶν καλουμένων γνωμόνων καὶ τοῦ συνήθους διαστήματος, ἵν[α ε]ὐμαρῶς [τὴν] ἐσομέν[ην τῶν] ὑδάτων εἴσροιαν ὑποδέχοιντο πρὸς ἀρδείαν τῶν ἐδαφῶν, τούτου κοινωφ[ελ]οῦς τυγχ[άνοντος.]［訳文は著者と校定者の英訳を参考に訳者が日本語訳した。］

そしてディオイケテスは、誰であれ賄賂を受け取ったり責任を逃れようとする者へ警告を、「全エジプトの救済に向けられた措置を危険にさらすこと」になるので、そのような者たちの生命と財産がかかっていると述べて、書簡を終えている[48]。

この書簡の残存により、農村地帯での書簡の回覧を確実に行おうとした行政機構の存在を知ることができる。私たちが目にする文書は、アレクサンドリアで作られたオリジナルの写しで、ファイユームの南方およそ80キロメートルのところにあるオクシュリュンキテス・ノモスの行政長官の役所で作られたものである[49]。行政長官は回状の前に自らの添え状を付けて、地方の役人たちにこの写しを送っている。4世紀初頭のパノポリス（アクミーム）からの同様の回状は、この種の公式発表の伝達の次の段階を明らかにする。この文書は、年に一度の、地方の灌漑設備の補修作業勧告を含み、その発信者は、この回状が「誰もが命令を知るように都市（ノモスの首都）だけでなく、ノモスの主要な村々（*mētrokōmiai*）でもそれぞれに」掲示されるように命じている[50]。

これらの3・4世紀の回状に似通った文書は、ローマ時代のより古い時期からは見つかっていないが、前述の回状でディオイケテスが描写したような堤防と運河の工事のための村レベルの調整に関する史料は、早いものでは紀元後40年代に書かれたファイユームからのパピルスのなかにある。そこでは、ナイルの氾濫が始まる前の数ヶ月間の水位が低い時期を主として、エジプト人の壮健な成人男性に求められた5日間の賦役を指す「ペンテメロス」（文字通りには「5日間」）として知られる制度によって、年ごとの灌漑設備の整備を国家が管理した[51]。5日間の賦役を終えた労働者たちには領収書が与えられ、その多く

---

[48] *P.Oxy.* 12.1409, ll.21-22: ὡς λυμαινόμενος τοῖς ἐπὶ τῇ σωτηρίᾳ συνπά[ση]ς τῆς Αἰγύπτου προῃρ[ημέ]νοις.

[49] ノモスの首都であるオクシュリュンコスは、現在のバフナサーである。

[50] *P.Panop. Beatty* 2, ll.222-228（300 CE）at l.228: μὴ μόνον ἐν τῇ πόλει ἀλλὰ ϙαὶ ἐν ταῖς τοῦ νομοῦ μητροκωμίαις ἀντίγρα(φα) καθ᾽ ἑκάστην προ[τιθ]ε̣ναι, ὡσὰν ἅπαντες εἰδῖεν（l. εἰδεῖεν）τὰ προστεταγμένα.［訳文は著者の英訳を参考に訳者が日本語訳した。］

[51] Sijpesteijn, *Penthemeros-Certificates*, 10-12. 最近公刊された証明書と注釈については Claytor, “Penthemeros Certificates from the Granary C123, Karanis,” id. “More Penthemeros Certificates from Karanis,” and Abd-Elhady, Gad, and Hartenstein, “Five Penthemeros Certificates from the Cairo Museum” 参照。

が残っている。標準的な形式の領収書は、労働者自身の名前とその父親の名前、公式に登録された村（*idia*）、そして労働をした運河を記している。同じ情報が政府の台帳にも同時に記録された[52]。「五日間賦役」に関する史料である領収書の典型的な例が、以下に示すファイユーム北東のカラニス村からの144年の領収書である。

> インペラトル・カエサル・ティトゥス・アエリウス・ハドリアヌス・アントニヌス・アウグストゥス・ピウスの治世第8年。カラニス（のために）、パトソンティスの砂漠の運河で、ハドリアノス月20日から24日まで、先年第7年の河岸の労働を彼は果たした。（第2の筆跡）プネフェロス、ペテウスとタイサスの息子、ペテスコスの孫。（第3の筆跡）私、ケレルが証明した[53]。

カラニスのプネフェロスが果たした労働が純粋な強制というより調整された地域主義の一形態であるのは、彼が作業した運河の名前から明らかである。この「パトソンティスの砂漠の運河」（*oreinē diōryx Patsōnteōs*, 中世のワルダーン運河 *Baḥr Wardān*）は、ハッワーラ付近でユースフ運河から分かれ、ファイユームの東縁を北に向かって走り、やがて北東のカラニスに到達する大きな運河である。それゆえ、自らの共同体に水を運んでくる、この運河でのカラニスの住人による作業はしばしば知られている[54]。カラニスから見て上流に位置する集落であるバッキアス[55]とフィラデルフィア[56]からの「五日間賦役」領収書にも、

---

[52] *P.Mich.* 6.381（2世紀後半）; *P.Münch.* 3.136（2世紀前半）.

[53] *SB* 6.9437a: ἔτους ὀγδόου Αὐτοκράτορος Κ[α]ίσ[α]ρ[ο]ς Τίτου Αἰλίου Ἁδριανοῦ Ἀ[ντ]ωνε[ίν]ου Σεβαστοῦ Εὐσεβοῦς. εἴργ(ασται) ὑπ(ὲρ) χω(ματικῶν) ἔργ(ων) τοῦ διελ(ηλυθότος) ζ (ἔτους) Ἁδριανοῦ κ ἕως κδ ἐν ὀρινεῖ (l. ὀρεινῇ) διώ(ρυγι) Πατσών [τ]εως Καρα(νίδος). (hand 2) Πνεφερῶ(ς) Πεθέω(ς) το(ῦ) Πετεσούχ(ου) (μητρὸς) Θαισᾶτο(ς). (hand 3) Κέλερ σεση(μείωμαι).［訳文は著者の英訳を参考に訳者が日本語訳した。］

[54] *SB* 8.9924a（114/5年）, *P.Sijp.* 42a（130年）, *SB* 6.9437a（144年）and c（146年）, *P.Cair. Goodsp.* 25（161年）, *BGU* 3.722（161/2年）, *P.Mich.* 6.419（162年）, *BGU* 15.2519（164年）, and *P.Mich.* 6.381（2世紀前半）. Claytor, “Penthemeros Certificates from the Granary C123, Karanis,” 67, n. 34からの引用。この運河については、Kraemer, “The Meandering Identity of a Fayum Canal” 参照。

[55] E.g. *P.Ryl.* 2.210（131 CE）.

[56] E.g. *SB* 16.12860（87/88 CE）.

この水路が現れる。ファイユームの南でも、テプテュニスの村人たちが「ポレモンの砂漠の運河」（*oreinē diōryx Polemōnos*）で労働したことが知られている。この運河は、「テプテュニスの砂漠の運河」（*oreinē diōryx Tebtyneōs*, 中世のタナブタワイフ運河 *Baḥr Tanabtawayh*）としても知られ、ファイユームの南縁沿いのテプテュニス村とその他の集落に水をもたらしている[57]。

砂漠の運河での地元の人々の労働は、すでに論じたプトレマイオス朝期の嘆願書（*SB* 18.13735）によって示される慣習、すなわち村落共同体が依存している水利インフラストラクチャーを毎年、共同で整備することと本質的に同じである[58]。しかし「五日間賦役」は、これらの地方的な慣習を制度化し、共同体への非公式な社会的義務を、国家への公式な強制労働の義務へと変えた。この「税」は肉体労働として課せられ、労働者の本籍地（*idia*）と分かち難く結びついていた。厳密に監視され押し付けられる「五日間賦役」は、地方自治が強制されるという独特の形をとった。そこで目指されたのは、農民たちを戸籍の上で属する村とそこの運河に行政的に常に縛り付けることでファイユームの灌漑された景観全体を保つことであった[59]。

しかし、居住地での労働を強制する以外に、「五日間賦役」は一部の労働者を彼らの村の外、最大で50キロメートル離れた場所での堤防と運河に関わる作業にも動員した。労働者は自らの村以外の村のそばの砂漠の運河でも働いたが[60]、遠くへ配置された労働者について言及がもっとも頻繁に見られるのは、運河水系の主な特徴である 2 つの場所においてである。1 つは、水を運んでファイユームに入ったユースフ運河の流路の最後の部分であるアルガイティス運河で、もう 1 つはプトレマイス・ホルム（ラーフーン）での管理業務である[61]。これら

---

[57]「テプテュニスの砂漠の運河」（*oreinē diōryx Tebtyneōs*）で働くテプテュニス住人：*SB* 18.13983（112 CE）, *P.Kron.* 66（117 CE）, *P.Kron.* 56（120-151 CE）, *P.Kron.* 57（120 CE）, *P.Kron.* 58（123 CE）, *P.Kron.* 60（131 CE）, *P.Kron.* 61（106-131 CE）, *SB* 18.13985（132 CE）, *SB* 18.13986（132 CE）, *P.Kron.* 69（153 CE）, *SB* 18.13978（138-161 CE）, *SB* 18.13980（140-141 CE）.

[58] オスマン朝期の類似したシステムについては、Mikhail, *Nature and Empire*, 175参照。

[59] Haug, “Environment, Adaptation, and Administration,” 68. Grey, *Constructing Communities*, 191-192から発想を得ている。

[60] *P.Mich.* 12.655（57/58 CE）は、南の「ポレモンの砂漠の運河」（*oreinē diōryx Polemōnos*）で作業するテアデルフィア村の住民を記録している。

の拠点の近くに住んでいる農民も整備作業に関わったと考えられるが証拠はない。だが、ファイユームの周辺部の村々から見つかった「五日間賦役」の領収書からは、アルガイティス運河でのバッキアス、カラニス、テプテュニスの住人による作業が知られる[62]。また運河水系の頭首工の重要な構成要素であろう「六水門」(*hexathyros*)と呼ばれる、プトレマイス・ホルムにある設備では、テプテュニス、ナルムティス、テアデルフィア、ソクノパイウ・ネソス、カラニスの村人が働いている[63]。また正確な位置が分からない、いわゆる「プトレマイス・ホルムの砂漠(の運河)」(*oreinē Ptolemaidos Hormou*)で、バッキアス、カラニス、ソクノパイウ・ネソスの住人が作業している[64]。

少なくとも住民のうちでいくらかの特権を享受した人々によって、このような動員が受け入れられたことを明らかにするのは、171年の嘆願書(*P.Bacch.* 19)である。ここでは、バッキアス村出身の数人の神官が、ファイユーム内部の小地区(郡;メリス *meris*)の行政官に、自らの村の外での労働を強いられていると訴え出ている。神官たちはバッキアスに留まり、近くのパトソンティスの砂漠の運河で求められた労働を果たすことが許されるように願っている。彼らが言うには、「村の近くの農地が水を得て、村の下流の貯水槽(*hydrostasia*)に通じる、パトソンティスと呼ばれる運河で堤防の作業に従事さえすれば、別の場

---

[61] アルガイティス運河については、Orsamus Pearl, "ΑΡΓΑΙΤΙΣ and ΜΟΗΡΙΣ," *Aegyptus* 34 (1954), 27-34参照。

[62] Bakchias: *P.Strasb. Gr.* 1.16 (119 CE), *P.Strasb. Gr.* 1.18 (120 CE), *P.Strasb. Gr*. 3.156 (122 CE), *P.Strasb. Gr*. 3.163 (128 CE), *P.Strasb. Gr*. 3.160 (130 CE), *P.Strasb. Gr*. 3.161+164 (130 CE), *P.Strasb. Gr*. 3.167 (143 CE), *P.Strasb. Gr*. 3.168 (144 CE), *P.Mert*. 2.69 (147 CE). Karanis: *P.Got*. 1 (140 CE). Tebtynis: *P.Stras*. 4.249c (129 CE), *SB* 10.10550 (209 CE).

[63] Orsamus Pearl, "ΕΞΑΘΥΡΟΣ: Irrigation Works and Canals in the Arsinoite Nome," *Aegyptus* 31 (1951), 223- 230. Tebtynis: *P.Kron.* 65 (136 CE), *SB* 18.13979 (143 CE), *P.Kron.* 68 (150 CE), *P.Kron.* 69 (153 CE), *SB* 18.13987 (153 CE) *PSI* 16.1528 (163 CE), *SB* 18.13989 (163 CE), *SB* 16.12674 (169-172 CE). Narmouthis: *BGU* 13.2258 (138 CE). Theadelphia: *PSI* 15.1519 (46 CE), *SB* 16.12316 (123 CE), *SB* 16.12317 (134 CE), *SB* 16.12598 (146 CE), *SB* 16.12599 (146 CE), *P.Sorb.* 1.59 (148 CE). Soknopaiou Nesos: *P.Lond.* 2.139B (51 CE). Karanis: *SB* 16.12299 (101-102 CE), P.*Wisc.* 2.79 (108 CE), *SB* 6.9231 (145 CE).

[64] Claytor, "Penthemeros-Certificates from the Granary," 71 with n. 37参照。Bakchias: *P.Grenf.* 2.53d (167 CE), *P.Fay.* 79 (197 CE). Karanis: *P.Mich.* 6.381 (2nd half II CE), *P.Col.* 7.168 (373 CE). Soknopaiou Nesos: *P.IFAO* 1.32 (69 CE).

所では作業をしないのが私たちにとって慣習（*ethos*）です」。地方の役人が「慣習に反して（*para to ethos*）、村から遠く離れた（*makrothen tēs kōmēs*）別の場所で働くことを私たちに強制している」のに抗議して、神官たちは、彼らが「村の近くの馴染みある場所で働く」ことが許されるために、慣例を破った役人の職権乱用をやめさせるように懇願している。この免除により、皇帝自身と「いとも祝福されたナイルの十分な氾濫」のどちらのためにも宗教儀礼を行い続けることが可能になると神官たちははっきりと述べて嘆願書を終えている[65]。

神官には強制労働がしばしば免除されていたが、この嘆願が成功したかは分からない[66]。だが、普通の村人には、農村地帯での徴用から免れる手段はほとんどなかった。力ずくの拒否は一般的ではなかったようだ。というのも、そのような例は、ファイユームではなくオクシュリュンキテス・ノモスのパピルス文書のなかに一例あるだけだからである[67]。受動的な忌避がより一般的な戦略であったのは確実で、パピルス文書のなかではアナコレシス（*anachōrēsis*）、すなわち「土地からの逃亡」と一般に呼ばれている[68]。この現象は普通、徴税や

---

[65] *P.Bacch.* 19（171 CE）: Ποτάμῳνι στρα(τηγῷ) Ἀρσι(νοίτου) Ἡρακ(λείδου) μερίδος παρὰ [Πε]τεύριος Πετεύριος καὶ Σισόιτος [Ὀρ]σενύφεως καὶ τῶν λοιπῶν ἱε[ρ]έων ἱεροῦ τοῦ ὄντος ἐν κώμῃ Βακχιάδι. ἐπεὶ ἔθος ἡμεῖν ἐστιν ἄγεσθαι εἰς χωματικὰ ἔργα οὐκ ἐν ἄλλοις τόποις, εἰ μόνον ἐν διώ[ρυγι] Πατσώντε[ω]ς λεγομένῃ ἀ[φ' ἧς] τά τε περὶ τὴ[ν] κώμην ἐδάφ[η ὑδρ]εύεται καὶ ἰς [τ]ὰ ὑδροστάσια τὰ ὑ[π' αὐ]τῇ κατέρχετται, νῦν δὲ ὁ ὑπὸ τ[ῦ] ἀιγιαλοφύλακος κατασταθεὶς ἐκβολεὺς βιάζεται ἡμᾶς παρὰ τὸ ἔθος ἐν ἄλλοις τόποις μακρόθεν τῆς κώμης ἐργάζεσθαι, ἀξιοῦμεν ἐὰν σοὶ δόξῃ κελεῦσαι αὐτὸν ἀποστῆναι τῆς καθ' ἡμῶν ἐπηρ[ί]ας ἰς τὸ δύνασθαι ἡμᾶς ἐν τοῖς σ[υ]νήθεσι τόποις ἐργαζομένους π[λη]σιάζουσι τῇ κώμῃ καθ' ἑκάστην ἡμέραν τὰς τῶν θεῶν θρησκείας ποιεῖσθαι γινομένας ὑπέρ τε δ[ι]αμονῆς τοῦ κυρί[ο]υ ἡμῶν αὐτοκ[ρ]άτορος Αὐρηλίου Ἀντωνείνου Καί[σαρος κ]αὶ τοῦ ἱερωτάτου Νείλου τε[λείας] ἀναβάς[ε]ως ἵν' ὦμεν βεβ[οηθημένοι.] Π[ε]τεῦρις (ἐτῶν) μ ἄση(μος) Σισόις (ἐτῶν) λε ἄση(μος) (ἔτους) ια Αὐρηλί[ο]υ Ἀντωνείνου Καίς[αρος τοῦ] κυρίου Παῦνι κ.

[66] 免除については Sijpesteijn, *Penthemeros-Certificates*, 9参照。神官の免除に関しては *P.Mich.* 6.381（2世紀後半）とそこでの議論を参照。また *P.Mich.* 11.618（166-169年）における視力の弱さを理由にしたバッキアスの神官の1人に与えられたとされる免除も参照。

[67] *P.Oxy.* 38.2853（245/6年）において、ティニテス・ノモスまたはヘラクレオポリテス・ノモスから来た地方灌漑監督官たちは、地元の運河での作業を強要しようとした農民たちによって攻撃されたと主張している。

[68] アナコレシス全般については、Naphtali Lewis, “A Reversal of a Tax Policy in Roman Egypt,” *GRBS* 34（1993）, 101-118参照。

強制公共奉仕からの逃亡とみなされるが、農民たちは農村地帯での労働からも逃げようとした。少なくとも、カラカラ帝はそのように考えており、215年にアレクサンドリア市民たちに「農村での労働（*ergon agroikon*）を避けるために、彼ら自身の田舎（*tas chōras tas idias*）から逃げた者たち」が確実に都市から「追い出されて」（*ekblēsimoi*）、村に帰ることを強要されるように宣告した[69]。

カラカラ帝の誇張にもかかわらず、帝政前期の「五日間賦役」に対する慢性的な抵抗の証拠はほとんどない。もし「五日間賦役」を調整された地域主義の一形態とみなす私の考えが正しければ、その相対的な成功は、利己心によって、つまり、ほとんどの農民が自らが依存する運河の維持に貢献するのを望んでいたからだと説明できる。しかしローマの調整された地域主義の持続性そのものは、結局のところファイユームの地域共同体の健全さに依存していた。事実、村落共同体の人口減少とその結果生じる解体は、運河水系を維持するのに十分な人員を確保するという国家の能力を損ねるので、大きな脅威となった。中世史家スチュアート・ボーシュが明らかにしたように、エジプトで15世紀に流行した黒死病がもたらした大規模な人口減少は、エジプトの灌漑インフラストラクチャーを荒廃させた。ローカルな運河水系はしばらく機能し続けたが、集落をまたいで水を運ぶ公共の運河を維持するのに十分な労働者を中世エジプト国家が見つけられなかったために、やがて全面的な機能停止が引き起こされた[70]。それゆえ、160年代に帝国全土で猛威を振るったアントニヌス疫病が、ファイユームの運河水系の崩壊の始まりの部分的な要因だったということはありうる。情報は乏しく解釈は難しいが、状況証拠が示唆するところでは、ファイユーム

---

[69] *P.Giss.* 40 ii（215 CE）, ll.24-25: οἵτινες φεύγουσι τὰς χώρας τὰς ἰδίας ἵνα μὴ ἔρ[γον] ἄγροικον ποιῶσι. 18世紀の強制労働についてのアラン・ミカイルの次のコメントも参照。「農夫たちは運河から泥を浚い、農作物を収穫するように強制された。（中略）しかし驚くことではないが、多くの農夫は、このローカルな強制労働を不快なものとみなし、免れようと試みた」。受動的な抵抗の例として、「そして強制労働が村の人々に課せられたその日、ウンム・ワッティーフ Umm Waṭīf は私を竈に隠した」という同時代の学者ユースフ・アルシルビーニー Yūsuf al-Shirbīnī が伝える17世紀の喜劇的な韻文をミカイルは引用している。Alan Mikhail, “Unleashing the Beast: Animals, Energy, and the Economy of Labor in Ottoman Egypt,” *American Historical Review* 118.2（2013）, 317- 348 at 343 with n.126.

[70] Stuart Borsch, “Environment and Population: The Collapse of Large Irrigation Systems Reconsidered,” *Comparative Studies in Society and History*, 46.3（2004）, pp. 451-468.

は疫病の影響をかなり受けた[71]。それぞれファイユームの東西の縁に位置するフィラデルフィアとテアデルフィアからの史料によれば、かつて繁栄し人口も多かった、これらの村では3世紀初めまでに大所領の存在感が増しており、大幅な人口減少があったと考えられる[72]。330年代までに、テアデルフィアの大所領も姿を消し、2世紀には2100から2300を誇っていた人口も成人男性が数十人となっていた[73]。数年のうちに、村は放棄され、テアデルフィア村から移住した人たちを連れ戻そうとした地方の役人の試みは暴力的に拒絶された[74]。

2世紀後半から3世紀前半にかけてのアントニヌス疫病とその他の伝染病の影響について研究者たちの議論は続いている。それゆえ、古代末期の開始時におけるファイユームの村落生活の衰退にアントニヌス疫病が影響したかを絶対の自信をもって述べることは、現段階ではできない[75]。しかし原因がなんであれ、テアデルフィアのような村の人口減少は、現実に起こった重要な現象であった。村々が衰退すると、残された住民は複数の共同体が依存していた公共の水路の維持を徐々にできなくなり、水争いも起こった[76]。しかし、ローマ国家は、

---

[71] Dominic Rathbone, “Villages, Land and Population in Graeco-Roman Egypt,” *Proceedings of the Cambridge Philological Society* 36（1990）, 103-142 at 114-119参照。エジプトからの史料についての最新の研究は、Isabella Andorlini, “Considerazioni sulla ‘Peste Antonina’ in Egitto alla luce del testimonianze papirologiche,” in Elio Lo Cascio（ed.）, *L’Impatto della “Peste Antonina”*（Bari: Edipuglia 2012）, pp. 15-28. 疫病の広範な影響について最大限に見積もる見解については、Kyle Harper, *The Fate of Rome: Climate, Disease, and the End of an Empire*（Princeton: Princeton University Press 2018）, pp. 111-115のまとめを参照。

[72] テアデルフィアについては、Dominic Rathbone, *Economic Rationalism and Rural Society in Third-Century A.D. Egypt: The Heroninos Archive and the Appianus Estate*（Cambridge: Cambridge University Press 1991）、フィラデルフィアについては、Paul Schubert, *Philadelphie. Un village égyptien en mutation entre le IIe et le IIIe siècle ap. J.-C.*（Basel : Schwabe 2007）.

[73] かつての人口については Sharp, “The Village of Theadelphia,” 164、のちの人口については、Bagnall, “The Population of Theadelphia” 参照。

[74] 隣接するキュノポリテス・ノモスとオクシュリュンキテス・ノモスに移住したテアデルフィアからの「逃亡者」を連れ戻そうとする、失敗に終わった試みについて報告は、*P.Sakaon* 44（331/332年）参照。

[75] John Haldon, Hugh Elton, Sabine R. Huebner, Adam Izdebski, Lee Mordechai, Timothy P. Newfield, “Plagues, climate change, and the end of an empire. A response to Kyle Harper’s The Fate of Rome（2）: Plagues and a crisis of empire,” *History Compass*, November 2018（online, no pagination）: https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1111/hic3.12506（Accessed 10 December 2018）による重要な警告を参照。

[76] Haug, “Predictably Unpredictable.”

この時期にも運河水系を維持する努力を放棄しなかった。3世紀後半から4世紀前半にかけてのどこかの時点で、ファイユーム西縁の4つの集落の村人が、彼らが共有していた公共の水路である「プシナリティスの運河」(*diōryx Psinalitidos*)で作業したと記録されている[77]。調整された地域主義は、4世紀半ばと後半にファイユームの別の場所[78]でも、エジプトの他の場所[79]でも知られている。それゆえ、この時期におけるファイユームの運河の衰退の進行は、国家そのものの失敗の結果ではない。むしろ、安定して繁栄した村落共同体が崩壊することで、ローマ帝政前期に実現していた国家と農村社会の関係が壊れた。これらの共同体が崩壊すると、運河水系は機能不全を起こし始め、もっとも脆弱な運河の末端にいる村人たちは、盆地の中央部の運河水系に移住した[80]。そこでは機能し続けた運河水系が残り、アブー・ウスマーン・アンナーブルスィー Abū ʻUthmān al-Nābulusī による13世紀のこの地域の財政調査のなかで非常に詳細に描かれるのである。

国家の後退：アイユーブ朝の地域主義

アイユーブ朝の下級役人ナーブルスィーは『ファイユームの村々』[『ファイユームとその村々の歴史』](1245年)で次のような厳しい非難をしている。

> 彼(スルタン、マリク・アルサーリフ。在位1240-48年)の国家の下僕たちと彼の王国の奴隷たちによる、ファイユームのことがらについての報告はおびただしい数になった。事実、耕作への関心は低下し、耕作の監督業務はおざ

---

[77] *P.Sakaon* 53. この文書に記載された集落は、ピュッリアスとナルムティス(現代のマディーナト・マーディー *Madīnat Māḍī*)が合併した村、ペディオン・アヌビアドス、テアデルフィア、エウヘメリアである。テアデルフィアは、もっとも少ない量の土砂を取り除いているので、4つの集落のなかでもっとも小さいようである。正確な流路の不明な、この運河について言及する他の史料については、https://www.trismegistos.org/geo, TM ID 1985参照。

[78] E.g. Karanis: *P.Col.* 7.167 (373 CE) and *SB* 20.14378 (374-376 CE).

[79] E.g. Oxyrhynchus: *P.Col.* 10.289 (331 CE).

[80] ファイユームの周縁部と中心部の環境の違いについては、Haug, "Environment and Adaptation" and id., "360 Days of Summer" 参照。

なりになり、状況が悪化するまでそのままであった[81]。

スルタンであるマリク・アルサーリフは、ファイユームを訪れた際に「地方の役人は、この地域が放置されているのが明らかになるまで無頓着であった」と叫んだと伝えられている[82]。この怠慢によりファイユームが収益の上がらない場所に衰退してしまった結果、来るべき改革の手引きとして、この破滅した地域の土地台帳を作成するために、経験豊富な財務官僚であるナーブルスィーをスルタンは派遣した。

事実、ファーティマ朝のエジプト支配が一世紀を過ぎたころの1068年から1074年までの動乱期から長きにわたって無視された結果、13世紀のファイユームはかなり縮小していた。内紛、低位の氾濫、飢饉、猛威を振るう飢餓が前例のないほどの不安定さを生み出した[83]。この時期の史料はほとんど残っていないが、ナーブルスィーの調査のなかにファイユームが再登場するまでに、国家はこの地域から後退していた。この地方の村の 9 割以上が分与地（イクター）として軍人に分配されていたとナーブルスィーは記している。これによって、軍人たちにこれらの村からの税収すべてが与えられた[84]。ファイユームの農業に対するアイユーブ朝のスルタンの利害関係は非常に少なく、ファイユームの運河水系が日々機能し維持されることに国家が自ら介入する動機はほとんどなかった。ナーブルシィーが調査記録の導入部となる数章で詳述しているように、広範に及んだ無視は、かつてファイユームに繁栄をもたらした水利インフラストラクチャーに大きな損害を与えた。

ナーブルシィーの記述によれば、ファイユームの問題が始まるのは、マンハー運河（ユースフ運河の中世の名前）からの水の流入を管理していたラーフーンのダム（*binā'* または *bunyān*）である。ここでは運ばれてきた土砂が徐々に堆積し、流入量を減らすダムの基部にある多くの管を詰まらせた。「かつては、マンハー運河の先端は毎年 4 ヶ月間だけが乾いていた」とナーブルシィーは主張

[81] ナーブルスィー『ファイユームの村々』31。ナーブルスィーの記述はすべて Rapoport and Shahar による英訳による［訳文は英訳から訳者が日本語訳した］。
[82] ナーブルスィー『ファイユームの村々』32。
[83] Rapoport, *Rural Economy and Tribal Society*, 47-51.
[84] 税収については、Rapoport, *Rural Economy and Tribal Society*, 10.

している。しかし、運河を浚渫し整備するのに繰り返し失敗したため、「今は8ヶ月間乾いており、ナイルの水は4ヶ月間（つまり氾濫の間）しか流れ込まない」としている[85]。この非難を裏書きするために、過去100年にダム施設の整備作業に関する公的な記録を見つけられなかったとナーブルシィーは付け加えている。ファイユームに流れ込む水量を増やそうとして国家がなしたいくつかの最近の試みは問題を悪化させただけだった。流入地点の運河の幅を広げたり、ラーフーンのダムの高さを上げたり、ユースフ（マンハー）運河の先端を変更しようといった試みは、流入地点付近にさらに多くの堆積を意図せずして引き起こし、水量が一番少なくなる6月にはそれが水面上に見えるほどであった[86]。だが、国家の無視がより目に見えて現れたのが、タナブタワイフ運河とワルダーン運河沿いであった。これらはそれぞれ古代の砂漠の縁を流れるテプテュニス運河とパトソンティス運河である、かつては大きな水路であったどちらの運河も沈殿した土砂で塞がれ放棄され、岸には古代の居住地の遺跡が並んでいた[87]。「長い時間とかなりの出費をかけること」（*al-mudda al- ṭawīla bi-l-amwāl al-jazīla*）だけが、これらの運河の再利用を可能にするとナーブルシィーは記している。一握りの放棄された村には、現地の人々の努力により再定住が行われた。しかし、必然的に強制力を行使し住民が逃亡するリスクを負う国家の介入がなかったので、それ以上のことはなしえなかった。

ナーブルィーの言葉に修辞的な誇張があるのは認めなければならない。事実、ファイユームの破滅的な状況を訴えることは、ナーブルシィーの任務の重要性を大げさなものにし、惨めに衰退した地方へのスルタンの配慮を示す。それでもダムとラーフーンの水の流入地点の現状は、運河水系の維持に国家がかつて

---

[85] ナーブルスィー『ファイユームの村々』35。

[86] ナーブルスィー『ファイユームの村々』44-46。

[87] ナーブルスィー『ファイユームの村々』46-47。タナブタワイフ運河（テプテュニス運河）沿いにあるブルジュトゥト Burjtūt、バドリス Badrīs、アクナ Aqnā、カスル・カールーン Qaṣr Qārūn は、それぞれ古代のペルケタウト／フィラグリス、パトレス、クナ、ディオニュシアスに同定される。ワルダン運河沿いのサマストゥース Samasṭūs とウンム・アルアサル Umm al-Athl は、プシミステュスとバッキアスである。シャイム Shaym とダムヤ Damya はとりあえず現代のコム・オシム Kom Aushim（古代のカラニス）とディメ Dime（ソクノパイウ・ネソス）と同定できるが、これは確実ではない。

果たしてきた重要な役割を物語る。プトレマイオス朝が作り出した運河水系の要であるこれらの設備と場所の維持にとって、建築技師の細心の注意とローマによる地域全体からの労働力の動員は不可欠であった。そのような厳重な監視がなければ、水の流れは少なくなり、灌漑の仕組みをもっとも効率よく機能させるのはもはやできなくなるのである。

こうした変化を古代以来のファイユームの衰退の証拠とみなすのは簡単であり不当なことでもない[88]。しかし、ナーブルシィーの記述は地域主義の勝利という別の見方も示す。ユースフ・ラポポルトとイド・シャハルが示したように、アイユーブ朝の灌漑は完全に地方の問題であった[89]。ダムそのものは中世の始めから単純なものになり、簡単な放水路へと変わった。それを動かし整備したのは、特殊な訓練を受けたからではなく、その設備を長いこと扱っていたために「技師」（*muhandisīn*）として知られる在地の人々であった[90]。さらにナーブルスィーの村ごとの調査は、村落レベルではファイユームの灌漑農業が高い生産性を保っていたことを明らかにする。彼が記述する123の集落のうち、11の集落を除いた残りの集落すべてで年間を通じて少なくともいくらかの水を得ることができ、通年の耕作が可能であった[91]。アイユーブ朝期のファイームは、介入し収奪しようとする中央国家の不在という状況に適応した、社会的・環境的に均衡の取れた新しい姿を作り出したのである。この新しいファイユームは、古代のファイユームほど大きくも豊かでもないが、人は住み続け、生産的で、その内部で自活できた。イスラームの歴史家と地理学者もファイユームが年間を通じて比類なき生産性を誇っていたと書き続けている。ファイユームを眺める者は「エジプトのどこにも、ファイユームに似たものや匹敵するものを知らない」と歴史家アブド・アルハカム‘Abd al-Ḥakam は記している[92]。彼より後

[88] 古典的な叙述は、A.E.R. Boak, “Irrigation and Population in the Faiyum, the Garden of Egypt,” *Geographical Review*, 16, No. 3（1926）, 353-364.

[89] Rapoport and Shahar, “Irrigation in the Medieval Islamic Fayyum.”

[90] ナーブルスィー『ファイユームの村々』41。

[91] Haug, “Predictably Unpredictable” 参照。ファイユーム中央部の環境全般については、Haug, “360 Days of Summer” 参照。

[92] Abd al-Hakam, *Futuh Misr*, Charles C. Torrey（ed.）, *The History of the Conquest of Egypt, North Africa and Spain, known as the Futūḥ Miṣr of Ibn ʿAbd al-Ḥakam*. Yale Oriental Series, Researches, Vol. 3（New Haven, CT: Yale University Press 1922）, 16.

の時代の地理学者マクリーズィー（紀元1364-1442年）はより言葉を尽くして、ファイユームの年間を通じて緑のある庭園はエジプトではない場所のようであり、地上において天国を映し出していると書いている[93]。ファイユームを田舎の僻地として無教養な住民もろとも嫌ったナーブルスィーにとってすら、ファイユームの「果樹園と木々と『下に河川が流れる庭園』」は楽園の光景だったのである[94]。

おわりに

ファイユームの事例研究が示唆するのは、前近代エジプトの灌漑における地域主義を高く評価する現在の研究状況には改良が必要だということである。ファイユームの灌漑農業の存続にとって国家が必要不可欠ではないことをナーブルスィーの記述は明らかにしたが、プトレマイオス朝およびローマ時代の灌漑には国家の力が深く関わり、かつてはより大きかった運河水系の維持に不可欠であったのは明白である。だが、これらの介入の強い国家ですら専制的でも全体支配的でもなく、運河水系のローカルな受益者との契約や協調あるいは強制といった様々な関係を通じてファイユームの水を統治した。それゆえ、前近代を通して変わっていった国家と社会、自然の関係を単一のモデルで説明できない。さらにファイユームの独自性ゆえに、この地域の歴史から得たいかなる結論もエジプトの他の場所に適応するのに慎重にならざるをえない。したがって本論文が示したのは、環境の地域的特徴と、エジプトを統治した多くの国家が持った様々な財政的・政治的目標とのどちらにも十分考慮する必要があるということである。抽象化を慎み、時代と地域の特殊性に基づいた立論によってのみ、エジプトの水管理における国家の役割について説得的な議論を私たちはできるようになるのである。

---

[93] Al-Maqrizi, *al-Mawaʿiz wa-l-Iʿtibar bi-Dhikr al-Khitat wa-l-Athar*, 2 Vols.（Bulaq: Dar al-Tibaʿa al-Misriyya, 1853）, 1:246.

[94] ナーブルスィー『ファイユームの村々』31。『クルアーン』2.25および3.15における楽園（*Janna*）の描写を引用している。

文献表

Ⅰ．パピルス史料

パピルス文書は、専門分野の慣例に従って引用される。略記については “Checklist of Editions” 参照：http://papyri.info/docs/checklist.

ギリシア語と一部のラテン語パピルスのテキストは、Duke Databank of Documentary Papyri によりオンラインで読むことができ、Checklist で調べられる専門分野で共通の略記に従って分類されている：http://papyri.info/browse/ddbdp.

Ⅱ．研究文献

Bagnall, Roger S., “The Population of Theadelphia in the Fourth Century,” *Bulletin de la Société d’Archéologie Copte* 24（1982）, 35-57.

Bagnall, Roger S. and Dominic Rathbone, *Egypt from Alexander to the Early Christians. An Archaeological and Historical Guide*（Los Angeles and London: Getty Publications and British Museum Press 2004）.

Claytor, Graham, “Penthemeros Certificates from the Granary C123, Karanis,” *Bulletin of the American Society of Papyrologists* 50（2013）, 49-75.

———, “More Penthemeros Certificates from Karanis,” *Bulletin of the American Society of Papyrologists* 54（2017）, 83- 102.

Crawford（Thompson）, Dorothy, *Kerkeosiris: An Egyptian Village in the Ptolemaic Period*（Cambridge: Cambridge University Press 1971）.

Eman, Abd-Elhady, Usama Gad and Cassandre Hartenstein, “Five Penthemeros Certificates from the Cairo Museum,” *Bulletin of the American Society of Papyrologists* 54（2017）, 59-82.

Haug, Brendan, “Environment and the Administration of the Roman Fayyūm,” in: Nadine Quenouille（ed.）*Von der Pharaonenzeit bis zur Spätantike - Kulturelle Vielfalt im Fayum. Akten der 5. Internationalen Fayum-Konferenz, 29. Mai bis 1. Juni 2013*（Leipzig, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag 2015）, 55-71.

———, “Water and Power: Reintegrating the State into the Study of Egyptian Irrigation,” *History Compass*, Special Issue: Ancient Environmental History, Vol. 15, Issue 10（October 2017）, Ari Z. Bryen（ed.）. Online, no pagination.

———, “360 Days of Summer: Experiencing the Fluvial in Egypt’s Fayyūm,” in: Tyler Franconi（ed.）, *Fluvial Landscapes in the Roman World*. Journal of Roman Archaeology Supplementary Series No. 104（Portsmouth, Rhode Island: Journal of Roman Archaeology 2017）, 139-58.

———. “Predictably Unpredictable: Water Rights, Community, and Conflict in Fayyūm Irrigation.” Forthcoming in Katelijn Vandorpe and Sofie Waebens（eds）, *Two Sides of the Same Coin – Dispute Resolution in Greco-Roman and Late Antique Egypt*. Forthcoming in a volume of Studia Hellenistica. Expected 2019.

Kraemer, Bryan, “The Meandering Identity of a Fayum Canal: The Henet of Moeris / Dioryx Kleonos / Bahr Wardan / Abdul Wahbi,” in Traianos Gagos（ed.）, Traianos Gagos（ed.）, *Proceedings of the Twenty-Fifth International Congress of Papyrology, Ann Arbor 2007*. American Studies in Papyrology（Ann Arbir: Scholarly Publishing Office, University of

Michigan Library 2010), 365-376.
Manning, Joseph G., "Irrigation et État en Égypte antique," *Annales. Histoire, Sciences Sociales* 57.3 (2002), 611- 23.
———, *Land and Power in Ptolemaic Egypt* (Cambridge: Cambridge University Press 2003).
———, *The Last Pharaohs: Egypt Under the Ptolemies, 305-30 BC* (Princeton: Princeton University Press 2010).
———, *The Open Sea: The Economic Life of the Ancient Mediterranean World from the Iron Age to the Rise of Rome* (Princeton: Princeton University Press 2018).
Mikhail, Alan, "An Irrigated Empire: The View from Ottoman Fayyum," *International Journal of Middle East Studies* 42 (2010), 569-90.
———, *Nature and Empire in Ottoman Egypt: An Environmental History* (Cambridge; Cambridge University Press 2011).
———, *Under Osman's Tree: The Ottoman Empire, Egypt, and Environmental History* (Chicago: University of Chicago Press 2017).
Moreno García, Juan Carlos, "Ancient States and Pharaonic Egypt: An Agenda for Future Research," *Journal of Egyptian History* 7.2 (2014), 203-40.
Rapoport, Yossef and Ido Shahar, "Irrigation in the Medieval Islamic Fayyum: Local Control in a Large-Scale Hydraulic System," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 55 (2012), 1-31.
———, *The Villages of the Fayyum: A Thirteenth-Century Register of Rural, Islamic Egypt*. The Medieval Countryside 18 (Leuven: Peeters 2018).
Rapoport, Yossef, *Rural Economy and Tribal Society in Islamic Egypt. A Study of al-Nābulusī's Villages of the Fayyum*. The Medieval Countryside 19 (Leuven: Peeters 2018).
Römer, Cornelia "The Nile in the Fayum: Strategies of Dominating and Using the Water Resources of the River in the Oasis in the Middle Kingdom and the Graeco-Roman Period," in Harco Willems and Jan-Michael Dahms (eds.), 171-192.
Sharp, Michael, "The Village of Theadelphia in the Fayyum: Land and Population in the Second Century," in in Alan Bowman and Eugene Rogan (eds), *Agriculture in Egypt from Pharaonic to Modern Times*. Proceedings of the British Academy 96 (Oxford: Oxford University Press 1999), 159-92.
Sijpesteijn, Pieter J., *Penthemeros-Certificates in Graeco-Roman Egypt. P.Lugd.Bat. XII.* (Leiden: Brill 1964).
Thompson, Dorothy, "Irrigation and Drainage in the Early Ptolemaic Fayyum," in Alan Bowman and Eugene Rogan (eds), *Agriculture in Egypt from Pharaonic to Modern Times*. Proceedings of the British Academy 96 (Oxford: Oxford University Press 1999), 107-22
Van Beek, Bart, *The Archive of the Architektones Kleon and Theodoros:* (*P. Petrie Kleon*). Collectanea Hellenistica – KVAB VII (Leuven: Peeters 2018).
Willems, Harco, "Nomarchs and Local Potentates: the Provincial Administration in the Middle Kingdom" in: Juan Carlos Moreno García (ed.), *Ancient Egyptian Administration*. Handbuch der Orientalistik Section 1, Ancient Near East 104 (Leiden: Brill 2013), 341-392.
Willems, Harco and Jan-Michael Dahms (eds.), *The Nile: Natural and Cultural Landscape in*

Egypt: Proceedings of the International Symposium held at the Johannes Gutenberg-Universitat Mainz, 22 & 23 February 2013（Bielefeld: Transcript Verlag 2017）.

Willems, Harco, Hanne Creylman, Véronique de Laet, and Gert Verstraeten, “The Analysis of Historical Maps as an Avenue to the Interpretation of Pre-Industrial Irrigation Practices in Egypt,” Harco Willems and Jan-Michael Dahms（eds.）, *The Nile: Natural and Cultural Landscape in Egypt: Proceedings of the International Symposium held at the Johannes Gutenberg-Universitat Mainz, 22 & 23 February 2013*（Bielefeld: Transcript Verlag 2017）, 255-343.

訳者解題

筆者のブレンダン・ハウグ氏はミシガン大学図書館および古典学部に所属する若手の古代史研究者・パピルス学者である。本稿は、熊倉和歌子氏（東京外国語大学）を代表とし訳者も加わる共同研究プロジェクト「環境・農業生産・記録管理――文書史料に基づくエジプト環境史の構築」（JFE21世紀財団アジア歴史研究助成課題）により来日したハウグ氏が2018年９月24日に早稲田大学で行なった講演（同研究プロジェクト・早稲田大学文学研究科中東・イスラーム研究コース共催）に修正を加えたものである[1]。

筆者自身による要旨が本稿の冒頭にあるので、ここで改めてまとめる必要はないが、エジプトの灌漑を国家が中央から管理したという19世紀末以来の古典学説に対して、地方の主体性が強調されるようになってきた近年の研究状況のなかで、ファイユーム地方の事例研究から灌漑において国家が果たした役割を正当に評価しようとするのが本稿の立場である。ハウグ氏の議論の魅力の一つは、視野に収める時代の広さにある。ハウグ氏は2012年の博士論文『砂漠を潤す――前近代のエジプト、ファイユームにおける環境、灌漑、そして社会』（*Watering the Desert: Environment, Irrigation, and Society in the Premodern Fayyūm, Egypt*, Dissertation of UC Berkeley, 2012）で、前４世紀から後13世紀にいたるまでの人間と自然が作り出したファイユームの景観の変化を考察している。そこで彼はパピルス史料にとどまらず、ナーブルシィーらイスラーム時代の記述、ヨーロッパ中心主義的・国家中心的な視点からなされた20世紀転換期の技術者の言説、地質学や水利工学といった自然科学の知見を駆使し、ファイユームの環境を包括的に論じている。本稿は彼の研究のエッセンスをよく示すものだと言えよう。

ヘレニズム・ローマ時代からイスラーム時代にかけての前近代エジプトにおける環境と農業への関心を共有する複数の研究者によって組織される共同研究プロジェクトでは、文書史料が多く残るファイユーム地方に注目し、史料の残存状況を含めた通時的な変化を追うことを目標の一つとして研究を進めてきた

[1] 本稿の原文は、https://umich.academia.edu/BrendanHaug から参照可能である（2019年１月21日閲覧）。

が[2]、関心を共有するハウグ氏の講演および来日中に行なった議論は実に刺激的なものであった。快く招聘に応じてくれたハウグ氏をはじめ、招聘・滞在・講演に携わった方々に謝意を示したい。翻訳にあたりギリシア語の音写において長母音は原則として無視した。アラビア語の音写について熊倉和歌子氏から助言を受けたが、誤りはすべて訳者の責任である。

[2] 熊倉和歌子、亀谷学、小澤泰生、髙橋亮介をメンバーとする研究プロジェクトについては、特集「環境・農業生産・記録管理――文書史料に基づくエジプト環境史の構築」『イスラーム地域研究ジャーナル』9, 2017および熊倉和歌子「限られた史料で何ができるか――中世エジプト環境史を模索する」『お茶の水史学』62, 2019を参照。